

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-61

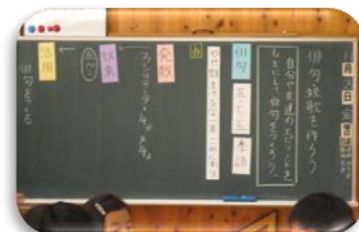
学校名・団体名	名古屋市立植田東小学校
HPアドレス	http://www.ueda-e-e.nagoya-c.ed.jp/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた 授業づくり
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>子どもはみんな「できるようになりたい」「分かるようになりたい」という願いを持っている。様々な特性や困難を持った子もそうでない子も、すべての子が「できた」「分かった」を実感することができるように、視覚の支援や学習環境の改善など、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに取り組んだ。これまで、授業に集中できなかった子や、やる気を失っていた子も、「できた」「分かった」を実感することで、学習意欲や自己肯定感を高めることができた。</p>	

1 はじめに

本校が目指している、授業における「ユニバーサルデザイン」とは、すべての子どもにとって、「分かる」「できる」楽しさが味わえる学習をめざし、教科における手立ての工夫と、個に特化した支援を駆使して行う授業のデザインのことである。本校学区は新興住宅地であり、転校生も多い。そのため、様々な特性を持った子どもが集まっている。困難や課題を抱えている子どもも少なくない。そこで、本校では、平成27年度、28年度の2年間、学習環境づくり、理解や意欲を促進する教材や教具の作成、授業の流れや形態を工夫することで、すべての子どもが「分かる」「できる」を実感できる授業をめざしてきた。そして、ユニバーサルデザインの視点を取り入れるにあたり、「安心して学べる環境づくり」「理解」「意欲」という3つの授業のポイントを設定し、以下のように授業のデザインを工夫した。

「安心して学べる環境づくり」

- 学習のねらい、学習や活動の内容、1時間の流れを提示
- ルールの明確化とルールを分かりやすく提示する工夫
- 学年や学校で統一的な指導ができるように職員が連携
- 教室環境整備と学習規律の定着化



「理解」

- ICTを活用した図や絵などの視覚支援、教科書の拡大提示
- 具体物の提示
- 適切な指示や発問の工夫
- 思考したことを整理するワークシートの活用
- 体験的活動、ICTを活用したシミュレーションや疑似体験活動



「意欲」

- ホワイトボードを使ったグループ討議や発表で学びの共有
- スモールステップで意欲を高める授業の流れの工夫
- 発表や話し合いの仕方を学ぶための話型カードの活用
- 苦手な子どもも取り組みやすく達成感を得られる教材の開発



また、臨床心理士を講師に招いて、子ども理解を深めるための手法、認知特性を生かした指導の仕方など、教師の授業力を高めるための研修をした。

1 実践の内容

(1) 「安心して学べる環境づくり」

学習のねらいを提示し、「課題を持つ→考える→話し合う→発表する→振り返る」といった授業の構造化を繰り返し進め、パターン化し、1時間の流れや、活動の見通しを持たせることで、学習への取り掛かりがスムーズになった(資料1)。高学年では、自分たちで課題を見付け、協働して解決していく学びの姿が見られるようになった。

(資料1)



1年生の算数の授業ではペアで学習活動を行った(資料2)。二人で協働して課題解決をすることで、自信が持てず、発表に消極的な子も、友達の前で、自信を持って解き方を発表することができた。また、プロジェクターを使って作業の様子を見せることで、他の子も発表の内容を理解しやすく、意見を言ったり、うなずいたり、学級が一体となって、共に課題を解決していく姿が見られた。

(資料2)



その他にも、黒板周りをすっきりさせたり、棚に目隠しをしたりし、視覚情報を精選することや教科書やノートの置く場所、学習用具の整頓の仕方を明確にすること、チャイム着席の徹底など、学習規律を整えることで、授業に集中できる子どもが増えた。

(2) 「理解」

授業についてのアンケートでは、90%以上の子どもが、実物・模型・図・写真があると分かりやすくなると答えている。言葉だけでは理解しにくい事柄や事象について、各学年に設置したプロジェクターを活用して、図や写真、シミュレーションで示したり、体験的活動を取り入れたりすることで、理解が深まり、話し合いが活発になる様子が見られた。

資料3は、星の動きの学習で、プロジェクターで映した時間ごとの写真をホワイトボードに映し、ペンで印を付けて、動く様子を示した例である。言葉ではイメージができない子どもにとって分かりやすく、時間ごとの位置や傾きを理解することができた。

また、4年生の総合的な学習の時間「命の学習」では、赤ちゃんとのふれあい(資料4)や聴診器で友達の心音を聞く体験をすることで、命の大切さ学ばせた。分かりやすい資料提示と、肌で感じる体験的活動により、学習になかなか取り組めなかった子どもが、進んで発言し、自らノートに考えを書くようになった(資料5)。

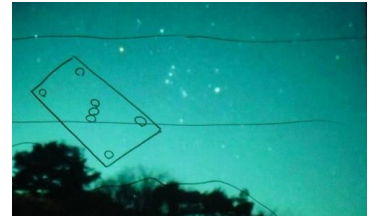
今後は、互いの学習の成果が共有され、さらに理解が深まる振り返りの在り方を研究したい。

(3) 「意欲」

3年生の国語科では、インタビューや話し合いの学習を行うときに、話型カードを使った(資料6)。話型カードの支援により、「できそうだな」という見通しを持つことができ、話し合いが苦手な子どもも進んで取り組む姿が見られた。事後のアンケートでは、事前と比べ、授業で「できた」「分かった」と実感できた子が76%から86%に増え、「話し合いが得意と感じる」という子どもが49%から86%に増えた。「できた」を実感することが自信につながるということが分かった。また、話し合いに自信がついてきたのは、「1対1で発表をし合う」→「感想を伝える」→「質問をする・答える」→「3人組で役割を決めて話し合う」というように、2年生のときからスモールステップで取り組んできた成果でもあると捉えている。

そして、すべての学級に8枚ずつ配布したホワイトボードを話し合いの場で活用した。全体の場合では、話し合いに消極的な子ども、小グループの話し合いでは、次々意見を出す様子が見られ、ホワイトボードに絵や図を描いて、自分の考えを相手に分かるように伝えたり、意見を記入しながら話し合い、考えを深めていったりして、活発に学び合う姿が見られた。今後は、対話的な学びの過程を捉え、考えをより深めさせるために、自己評価や評価規準の在り方を研究したい。

(資料3)



(資料4)



(資料5)



(資料6)



(資料7)



3 おわりに

ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、プロジェクターやホワイトボード、自作カード等を活用して授業改善をすることで、子どもたちの学習意欲が高まる姿を見ることができた。どの子どもも「できるようになりたい」「分かるようになりたい」という思いを持っていることを改めて感じた。また、子どもたちが前向きに学習に取り組むようになるにつれ、異なる意見を受け入れ、互いの頑張りを認め合う姿が見られるようになった。一人一人の理解が進むことにより、みんなが同じ土俵に乗り、共に学ぶ関係が教室の中に築かれてきたからではないかと考える。今後も、子どもたちの思いに応えられるように「できる」「分かる」が実感できる授業づくりをめざしていきたい。